7. 松本市において着地型観光を根付かせるために～観光をまちづくりに活かすには～

松本市地域づくりインターン第4期生・中心市街地担当　丸山 隼

はじめに

かつての旅行業の主流は、多くの旅行者が在住する「発地」において、交通機関での移動を含んだ旅行商品を企画、募集し、観光目的地である「着地」を訪れて再び「発地」へ戻る行程を管理・運営するものであった。この旅行業の一連の事業形態を「発地型観光」と呼ばれている。しかし、この「発地型観光」の問題点は、①効率化が優先されるためツアーの内容が画一的になり、消費者のニーズに対応しにくいこと。そして、②「発地」の側が主導して企画されるため、「着地」側の配慮が充分でないこと。この2点が「発地観光」の課題として挙げられてきた。

それに対して近年注目を浴びてきたのが、「着地型観光」である。「着地型観光」とは地域住民が主体となり、観光資源を発掘、プログラムを企画し、旅行商品としてマーケットへ発信・集客を行う観光事業への一連の取り組みである。主に都会にある出発地の旅行会社が企画して参加者を目的地へ連れて行く「発地型観光」と比べて、「着地」側の地域資源を活かしやすく、地域住民の主体性も発揮しやすいことから地域振興につながることが期待されている。

この着地型観光を取り入れることで、観光客は、地域で体験学習や住民との交流などが生まれる。また、地域としても住民は自分たちで観光客に教えることによって友好的な関係やまちづくりに対し主体的になる。松本市において着地型観光を活用したまちづくりが、地域づくりのひとつの手法となり今後のまちづくりに必要となってくる。

以上のことから、私は松本大学特別調査研究員(地域づくりインターン)として、「観光」を研究テーマとし、特に着地型観光による地域振興「観光まちづくり」が地域にどのような影響をもたらすのか。また、地域の特色にあったツーリズムとは何かを探求する。

1章　概要

本論文では、はじめに「観光」と「まちづくり」の定義を明確にし、「観光まちづくり」について仮設をたて、その仮説から求められるものはなにか調査していくこととする。

1節　「観光」の定義

広辞苑によると「観光」とは、「他の土地を視察すること。また、その風光などを見物すること」と定義されている。これは、日常から離れた場所を「観る」行為、つまり、非日常を「観る」ことが観光の本質であると今まで考えられてきたのではないか。しかし、平成7年に国道交通省の観光政策審議会による「21世紀初頭における観光振興政策について」を見ると「観光」の定義は、下記の図1のように定義されている。

（図1　観光の定義(国土交通省より)）

○人々にとって
・ゆとりとうるおいのある生活に寄与
・地域の歴史や文化を学ぶ機会
○地域にとって
・地域住民の誇りと生きがいの基盤の形成
・地域活性化に寄与
○国民経済にとって
・大きな経済効果
○国際社会にとって
・国際相互理解の増進、国際平和に貢献

広辞苑の定義と図1の定義を比較してみると、観光地にある物珍しいものを確認し、家族や友人に土産話をするような物見遊山的に「観る」だけでなく、地域住民との触れ合いや地域の文化を学ぶなど、観光客と地域住民の双方にとってメリットがあるような観光のあり方が模索されてきているのではないか。また、今後の観光に求められるニーズも多様化していくのではないかと考えられる。

2節　まちづくりの定義

「まちづくり」とは、一般的には「行政が行う総合的な市街地の整備・開発。住民が主体となって行うもの」(広辞苑)「建物や道路といったハード面や、歴史文化などのソフト面を、保護・改善する事によって、さらに住みやすいまちとする活動全般を指す」(Wikipedia)とされている 。これはまちをつくる主体として政府や行政が想定されている既存の都市計画とは異なり、地域に住んでいる者がその地域をよくする動きであることが求められると考えられる。西山卯三によれば、「まちづくりとは、①住みよい物的な空間を作ること、しかし、それだけでなく、②その中で営まれる「暮らしづくり」、そして③そこで生活をし、それを推しすすめる主体を作り出す「人づくり」、この3つを含んでいるということである」と述べている。また、そのような「まちづくり」を進めていくためには、ハード面・ソフト面の両面にわたる整備が必要であり、行政と住民とが協力し合いながら、連携をしていくことが重要だと考えられるといえるのではないか。

3節　観光まちづくりの必要性

これまで「観光」と「まちづくり」についてどのように定義されているかをみてきた。観光を通じてまちづくりに寄与すること＝観光まちづくりが求められるとするならばどのような観点に注意する必要があるのであろうか。山根宏文によれば、「観光まちづくり」において求められる背景として以下の４点をまとめている。

第1に大企業や観光産業を中心に振興するのではなく、地域住民を主眼においてまちづくりを行い、それによって観光を振興することである。

「住んでよし、訪れてよし」の理念から、地域の魅力を高め、アイデンティティを醸成し、誇りと愛着の持てるまちづくりを推進している。

第2には、バブル期に推進された開発中心の観光振興ではなく、既存の地域の自然・伝統文化・芸術・歴史・産業などの観光資源の価値を見出し、それらを保護し、活用法を創造するとともに、持続可能な観光を推進していることである。

第3には、外国人旅行者・訪日推進のための長期的な取り組みがなされるようになってきたことである。

第4には、急発展する高齢化に対応するために、旅行しやすい環境づくりが推進されてきたことである。

山根宏文「観光振興」香川眞編『観光学大事典』木楽舎、2007年、118ページ

これらのことを踏まえると、これから求められる「観光まちづくり」とは、地域住民が主体となって観光を通した地域づくりを行うこと＝観光まちづくりが重要であると考えた。そして、地域の外から来た人を受け入れることで人と人との交流を活性化させ、その地域の歴史や文化などを持続可能な形で伝承していくことができる「まちづくり」の視点が観光振興においても有効な手法だと考えた。

4節　研究の目的

これから求められる「観光まちづくり」とは何かということを検討するにあたり、以下の3点について考えていく。

①　観光まちづくりを目指すうえで地域住民の役割とは何なのか？

これまで、「発地型観光」が主流であったために、地域住民と観光客の関係は良好なものではない事例も多く見られた。また、地域について愛着を持たない形で訪れる観光客は、ゴミを投棄したり・道路の渋滞を引き起こしたりするなどの観光公害をだし、観光に対する悪循環ができ、双方に対立関係が生み出されていた。しかし、観光を「着地型観光」にすることで、観光客は住民と交流ができ、住民側も案内やまちを磨く等の好循環が着地型観光には可能だと考える。そこで、地域住民の役割とは何だろうか。

②　観光まちづくりを行うことで地域のメリット・デメリットは何なのか？

かつては地域の非日常を観ることを目的に、その地域に訪れていたわけだが、今後はその地域の日常を「観る」ことが求められてくる。「観る」ことで、地域住民にとって、どのようなことがプラスとなりうるのか。また、マイナスとなるのか調査していく。

③　今後求められるツーリズムは何なのか？

観光まちづくりのアプローチは多様である。その土地ならではの「食・食文化」を中心にした、地域の人々の日常を感じ、体験することができるフードツーリズムがある。そして、自然体験や農

業体験、加工体験などの農村の暮らしを学ぶグリーンツーリズムもある。このように我が国においてツーリズムは多種多様にあるが、私が関わっている地域ではどんなツーリズムが必要となってくるのか。また、体験型観光では何を体験してもらえば、観光客のニーズに合い、まちづくりが行えるのか検討していく。

5節　研究の流れ

以上のことから、自然体験や地域住民との交流を目的にした実践研究から、どのようなことが今後の観光まちづくりに必要となってくるのかを明らかにしていく。また、地域資源の活用法の検討や地域住民とのつながりづくりを行うためには、何の要素が重要となっていくのか考えていく。そして、着地型観光を行うための要素を探し検討していく。

2章　事例研究

1節　松本市観光ビジョンから見る松本市における観光視点での現状と課題

松本市観光ビジョンとは、平成18年に策定された観光戦略の全面的な見直しに伴い、名称を松本市観光戦略から松本市観光ビジョンに変更したものである。

松本市で観光戦略が策定された平成18年と比較すると、旅行者のニーズの多様化や訪日外国人の急増など今日までの環境の変化が著しく、それに伴う課題も出ている。具体的には、旅行者ニーズへの対応のための資源の再確認・ブラッシュアップにより、国内外の旅行者に対するテーマ、地域の特性を活用したメニューの提案・発信や情報発信手段の活用としてSNS（Facebook、Instagram）」公衆無線LAN（Wi-Fi）の整備などが挙げられる。そのため、松本市が目指す将来像の実現に向け、観光に携わるさまざまな業種が連動し、市場の動向に即した戦略を展開する際の指標となるものである。

（1）松本市の現状

松本市の観光資源は、歴史・芸術・山岳・食など多種多様にあり、その中でも松本城や浅間温泉は観光客が年々増加傾向にあり、松本の代表的な観光地として定着している。

（図2　松本市における入込客数）

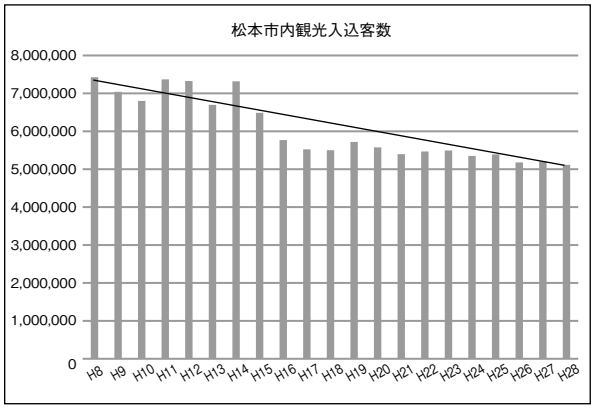
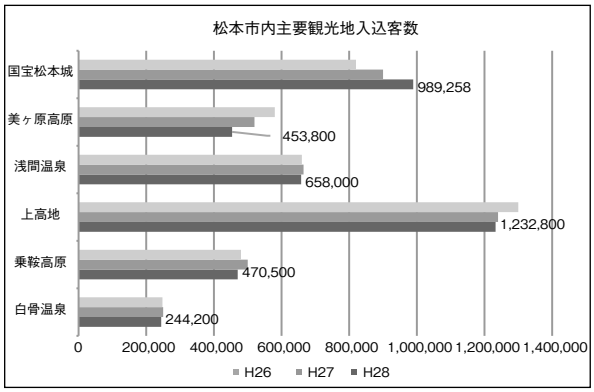


図1から、松本市内の観光客が平成8年から平成28年の約20年間の観光客の推移をみると約2300千人の来訪客が減少していることが分かる。これは、H16年度から始まった上高地入山規制が一番の要因だと考える。そこで、上高地とそれ以外の松本市内主要観光地入込客数を下記の図3にまとめた。

（図3　松本市内主要観光地入込客数）

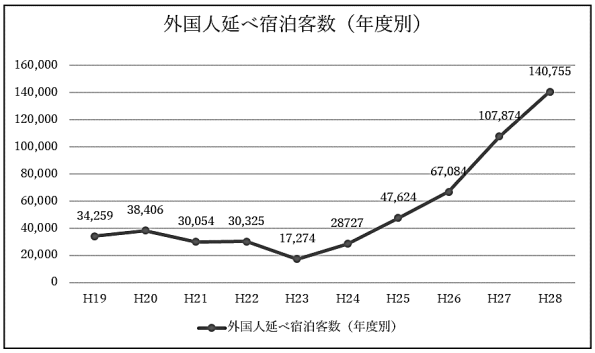


松本市主要観光地を比較してみると、国宝松本城は年々増加傾向にあり、観光地として定着しているが、図2から美ヶ原高原は減少傾向にあり、交通規制による二次交通や上記にも挙げた入山規制が課題となっているのだと考えられる。

ここ近年の観光の動向をみると、観光客の旅行目的、ニーズの変化、観光形態などが多様化し、特に観光のストーリーや日常の体験が重視されるようになってきたといわれている。また、近年、地方創生の大きな柱として観光振興の重要性が一層高まってきている。人と人とのふれあいや歴史・伝統文化に触れ、学びを深めることで、まちに潤いと賑わいをもたらす。これが、地方創生の鍵として注目を浴びてきている。また、平成28年の松本市内訪日外国人旅行者数が14万人を超え、前年比30.5％増と県内最多となっており、台湾・イン

ドネシア・ロシアが前年比より増加傾向にあるため、訪日外国人客に対応したインバウンド観光の振興も求められる。

（図4　松本市の現状 市内外国人宿泊者数の推移）



(2)松本市の観光における環境の変化

松本市の観光における環境の変化としては、旅行者のニーズの多様化や情報発信ツールの普及などが求められるようになったことが挙げられる。

旅行者のニーズに関しては、「モノ消費」(商品の所有に価値を見出す消費傾向)から「コト消費」(商品やサービスを購入したことで得られる体験に価値を見出す消費傾向)に移行したといわれている。これはその地域でしか体験することの出来ない価値を見出した着地型観光が松本市においても求められていることを意味する。さらに情報発信ツールは、SNS(Facebook、Instagramなど)の利用者が増え、非常に強い情報の発信力をもつことから、観光地の情報をアクセスすることが出来る情報発信ツールが求められる。

(3)松本市の観光の課題

松本市での観光に関する課題としては、下記のものがあるといえる。

- 多様化する旅行者ニーズへの対応と滞在型の推進として資源の再確認
- 国内外旅行者に対するテーマやストーリー性をもった観光資源へとブラッシュアップ
- 地域の特性を活用したメニューの提案・発信
- 旅の満足度を高めるためのおもてなし人材の確保・育成(案内、旅料飲食、土産、交通等)
- 旅行者の利便の増進(二次交通、案内ツール、UD、パッケージ商品等)
- 訪日外国人観光客への対応

2節　新潟県新潟市における着地型観光とまちづくり

松本市での旅行者のニーズや情報発信などの課題を踏まえて、地域資源を活用し、体験型交流の観光まちづくりを実施している新潟観光コンベンション協会に着目して事例研究を行った。

(1)消費者と生産者のつながりが継続するまちづくり

公益財団法人新潟観光コンベンション協会は観光まちづくりの取り組みとして平成19 年から新潟・食と花の交流プログラム「にいがた時間」をスタートさせた。このプログラムは、「地域の素材と人と文化をつなぎ、新潟の旬を楽しむ時間を提供する」をコンセプトに、新潟市を中心に周辺エリアとの連携の中で、体験型交流プログラムを実施するものである。季節の旬や、その場所でしか体験できない地域の素材を活かし、農家やものづくりの職人らが、自分の生活や仕事の場で観光客と直接やりとりをしながら地域の魅力を語ってもらう。観光客を受け入れる場も民家や工房、農地などであり、観光客は新潟の生活・ものづくりを直に体験することができる。こうした観光プログラムによって、新潟の農家や職人などが主役の観光交流のネットワークが生まれている。生産者と参加者が深い交流で結ばれることによって、地域住民と観光客の交流がツアー後にも継続する観光まちづくりが進んでいる。

(2)地域資源の発掘と活用術

「にいがた時間」では、次の2点の地域資源を活かし、まちづくりを行っている。

①地域プロデューサーが企画する、農家や職人が主役の観光プログラム

その土地の風土や文化、人との出会いを全面に打ち出したツアーを生み出すには、地域の人々とのコミュニケーション力、目の肥えた消費者の感性に響く地域の魅力を掘り起こす目利き力を持った地域プロデューサーが必要である。食と花の交流プログラムをより広く展開するために、新潟ではそうした地域プロデューサーの育成が課題となっている。

「にっぽんトラベルレストラン」は、季節ごとにその地に精通した地元の地域プロデューサーが企画する。その時、その場でしか味わえないシチュ

エーションで準備される一日限定の特別な旅である。新潟の地域プロデューサーが、農家、職人、まちづくりに取り組む住民が主役となった旅をつくり、訪問者と彼らをつなげ、質の高いコミュニケーションを生み出している。

②新潟と首都圏とのネットワーク

新潟のこだわりを持つ生産者と、東京の消費者とのマッチングを実現しているのは、新潟側の地域プロデューサーのみならず、東京側にもプロデューサーが存在しているからである。東京側のプロデューサーの一人が、「六本木農園」や「丸の内朝大学」をプロデュースするプロジェクト・デザイナーである古田秘馬氏だ。[※1]横山氏と古田氏は「1回だけの観光で終わるのではなく、新潟で出会った生産者と消費者の交流が続く仕掛けづくり」を目指している。“農業実験レストラン”である「六本木農園」では、新潟の農家やものづくりの職人が来訪するイベントを実施しており「新潟で出会った農家さんが来ます。東京でもう一度会いませんか？」と消費者に呼び掛ける。新潟と東京の人(生産者や消費者)、もの(新潟のほんものの農産物)、情報(リアルな交流)が相互に行き来する仕掛けによって、一度では終わらない「人と人のつながり」を生み出している。

(3)事例研究からの所感

新潟観光コンベンション協会では、これらの取り組みによって主催旅行の参加人数が約3年間で295人から458人に倍増、収益も約40万円から約514万へ十数倍増加して折り成果が上がっている。こうした事例研究から、観光まちづくりを行う上で、地域住民と観光客が直接やり取りできる場の創出が求められることが分かった。このやり取りできる場は、観光客にとって気軽に立ち寄ることができる、居場所としての役割を果たしているのだと考える。さらに、人と人との交流が生み出される場が地域資源の活用に結びつけられると考えられる。

ここでいうところの地域プロデューサーは、地域の内と外を結びつける役割を担っているのだと考えている。人と人とのつながりを作ることで観光資源の発掘など地域づくりを行うために、地域プロデューサーが求められる。そして、私自身の役割も人をつなげる仲介役になるのだと考える。

3節　松本市において着地型観光を根付かせるために

松本市の現状と事例研究から、松本市において着地型観光を根付かせるために、私は以下の2つの点を重視していくことが求められてくると考えている。

①居場所の創出

新潟市の事例から、着地型観光を行うための基盤として居場所の創出が必要になってくるのだと考える。観光客や近隣住民にとって気軽に立ち寄り、双方の話ができる場が観光まちづくりには必要になってくるのではないか。

②体験型交流

観光まちづくりの視点として、地域の資源を来訪者に体験や学習させることで、観光客のニーズに対応し、地域のとっても資源が誇れるようになるのではないか。そして、住民にとって話しやすく、観光客にとっても学習できる観光まちづくりが重要だと考える。

3章　実践研究

1節　保存樹ケヤキに着目した実践事例

着地型観光を根付かせるためのモデルとして、ケヤキの木に着目した実践研究を行った。

このケヤキを地域の居場所として活用するとともに、来訪者への体験型交流が可能であると考え、今年度は以下のことを実施した。

(1)ケヤキプロジェクトの背景・経緯

田川地区渚本郷町会のケヤキは、樹齢400年～600年の樹が10数本植えられている。ここにケヤキが植えられた理由として、周辺を田川や奈良井川に囲まれており、地下水位が高く、地盤が弱い場所であった。そこで地盤強化のため、お城を建築する下準備として水をよく吸うケヤキの木が植えられた。植えられたケヤキは大きく成長し、落ち葉は田畑の肥料になり、枝はかまど等の焚付として利用された。また江戸時代には、まちが洪水に見舞われた時に、ケヤキが防波堤の役目を果たしてきた。

また、その当時は、ケヤキの周囲も、現在のように宅地化されておらず、地域住民の憩いの場として役割を果たしていた。ケヤキの木は、この地

域の人々の歴史を見守ってきたものであり、ケヤキとともに人々の暮らしが営まれていたといえる。このケヤキは、人々の生活を支え続けた「地域の宝」となり得えていた。

しかし、宅地化が進み、新しく住民入ったことにより、ケヤキの役割であった憩いの場が成り立たなくなった。その結果、近年ではケヤキの落ち葉に被害などから、近隣住民に疎まれるようになり、「ケヤキを切ったほうが良い。」「ケヤキは保存した方がいい。」とケヤキの伐採派と保存派に分かれ地域を分断させるトラブルの種となっていた。平成26年にケヤキ所有者の方から、この問題を解決していきたいと相談を受け、松本大学で「ケヤキプロジェクト」が発足した。現在は、松本大学と「緑と景観を考える会」が連携して活動を行っている。このケヤキプロジェクトは、ケヤキの価値を見直し「地域の宝」にしていくことを目的にし、地域住民とケヤキが共存できるあり方について考えることを目標に活動を行ってきた。そのような「地域の宝」を活かしていく発想は、当該地域の着地型観光や教育旅行の受け入れにも活用できるのではないかと考え、ケヤキプロジェクトにかかわりながら観光まちづくりとしての活かし方を考察しようと試みた。

(2)オープン・スペースとして活用した住民同士のつながりの構築

ケヤキ所有者の方のご厚意で、ご自宅の庭をオープン・スペースとして活用し、地域の方や大学生等と触れ合えるような場としていくために、下記のようなプログラムの企画・実施に携わった。

①飯綱神社例大祭＆ケヤキ祭り

ケヤキ所有者の敷地内に祀られている飯綱神社は、室町時代の武将、小笠原一族の生活環境や水源を守る水神様として祀ったことが始まりとされており、お社は昭和33年に現在の場所に安置された。伏見稲荷大社・北野天満宮の祭神を加えて縁結びの神社として神徳に預かっている。飯綱神社の例大祭を地域に開いて開催するとともに、それにあわせてケヤキ祭りを開催することとした。ケヤキ祭りでは、お祭りにブースを出す出展者とお祭りを訪れた来訪者とが、ケヤキをテーマにしながら語り合う場を設けることが出来たのではないかと考える。

①地元小学校との落ち葉拾い

地元小学校の子どもたちと松本大学生が落ち葉拾いに参加し、ケヤキプロジェクト関係者と小学生たちとの交流を図り、ケヤキについて知ってもらうことを目的にしている。

落ち葉拾いでは、写真1では、けやきの落ち葉の拾いをした後に、子どもたちに自分たちの町にあるけやきについて語ることができ、けやきのことについて知ってもらうことができたのではないかと考える。写真2でみられるように、子どもたちにとって落ち葉拾いは自然と触れあう経験ともなっているようであった。

（写真1　落ち葉拾いの様子）

（写真2　落ち葉拾いの様子）

(3)自然体験型交流プログラム（けやきっ子ひろばの開催）

自然体験型交流プログラムの一環として、けやきっ子ひろばを開催した。これは、地域住民の方を講師として招き、昆虫講座やコケ玉づくりなど自然との関わりがある企画を考えた。また、親子とプロジェクト関係者との交流を深めた。

けやきっ子ひろばでは、講師役に地域住民の方たちになってもらうことで、ケヤキの活動に対する参加者や理解を広げることができた。また世代を超えた交流の場を作り出すことができたのではないかと考える。

（写真3　けやきっ子ひろば1）

（写真4　けやきっ子ひろば2）

2節　フードツーリズムに着目した実践事例

(1)日本屈指の山岳景勝地　上高地におけるニューツーリズムの発見

毎年9月に行われている松本大学・日本大学・明星大学の学生との合同ゼミに参加した。これは、学生たちが実際にまちへ出て、地域活性化について考えるとともに、若者の発想をまちづくりに活かすきっかけとする研修プログラムである。

今年度は、5つのプログラム（以下に記載）にて、合同ゼミを実施した。

①学生カフェを通じてまちづくりを考える
②松本の観光ガイドマップを検証する
③松本に新しい食べ歩きの文化を創る～商品開発に取り組もう
④昭和の松本の歴史を聞き取る
⑤日本屈指の山岳景勝地　上高地におけるニューツーリズムの発見から

今年度の合同ゼミの上高地グループでは「ICT」・「体験型・交流型」・「インバウンド戦略」の3つの観点から活動に取り組んだ。具体的な目的は以下のとおりである。

①地域資源を活かした体験型・交流型の要素を取り入れた新しい上高地の楽しみ方
②インターネットメディアやSNSを活用した観光プロモーションの方法
③インバウンド戦略も目指していて長期滞在型の訪日外国人向けのニューツーリズムを生み出す

（写真5　合同ゼミ）

（写真6　合同ゼミ）

ことを目的にしている。

この上高地での取り組みは、自然をテーマにした際、フードツーリズムをどのように活かすのかについて考える学習の場となった。特に、合同ゼミで経験をした「ソトメシ」は、開放感があり、今までにはない楽しさを味わうことのできる観光のコンテンツとして有効であることに気がつくことができた。これはけやきプロジェクトでの取り組みにも応用することができるのではないかと考えた。

(2)巣鴨地蔵通り商店街の視察から見る食べ歩きの文化

松本大学と上土町会で合同まちづくり研修を行った。研修先は、巣鴨地蔵通り商店街であり、高齢者に人気な商店街であることから「おばあちゃんの原宿」と呼ばれている。また、「歴史と文化を大切にし、人にやさしいまちづくり」をこころがけている。人々の安らぎの空間であるとともに、生活空間にもなっている商店街である。

この巣鴨地蔵通り商店街において、主に次の2点について調査しに視察研修を実施した。①人にやさしいまちづくりにしていくための工夫②フードツーリズムを目指すにあたり、来訪者のニーズを満たしているのか。又は、どんなモノが売られているのかを調査し、まちづくりの参考にしていく。

この視察研修を通して、巣鴨の商店街が地域住民にとって、日用品や食品などが買え、外に出なくても生活できる場所なのだと分かった。また、生活上の悩みごとや困ったことなど無料で相談できる「とげぬき生活館　相談所」があり、この相談所があるからこそ、地域住民が住みやすくなるのではと感じた。

そして、フードツーリズムについては、この巣鴨商店街で販売している食品が大学芋などであり、中心的な来訪者である高齢者に対応した商品の陳列であることが見て取れ、高齢者のニーズに対応していると感じた。

以上のことから、この巣鴨地蔵通り商店街は日常のものを販売していることから、高齢者にとってやさしいまちとなっていること。また、困りごとなど相談できるところがあることで、悩みを解決することができる場、同じ悩みを持った住民同士が連携できる場になる。これが、今後まちづくりを進めていくうえで、重要なことになってくるのだと考えた。

（写真7　とげぬき生活館　相談所）

4章　考察

本章では、実践研究と事例研究を通して、今後求められる観光まちづくりを考えていく。また、課題を整理して明確にしていく。

1節　地域資源の活かし方

ケヤキプロジェクトの活動を通して、自然と触れ合い自然をテーマにした体験型学習を実施できたことが大きな成果となったのだと考える。また、地域住民を講師として招いたことで、ケヤキ関係者と参加者との交流のきっかけとなったのではないかと考える。

しかしながら、ケヤキ以外の文化や歴史等の地域資源を活用した、テーマやストーリー性のある観光まちづくり。そして、住民や来訪者に対して交流のきっかけづくりを継続的に行っていくことが今後求められると考える。

2節　事業に関わる者たちの主体性の構築

今年度の活動を通して、着地型観光を実施可能にする手法として、地域の方以外にも事業関係者に観光まちづくりのことを理解してもらうこと。そして、観光まちづくりに対し主体的に動いてもらうことが重要なのだと考える。また、地域資源の活用法の模索を住民と考えることによって主体性が構築できると推測する

3節　ケヤキプロジェクト振り返りから見る課題

ケヤキプロジェクトでは、12月に松本大学生にアンケート形式で今年度の振り返り実施した。(資料編　図1)この振り返りでは、「もっとケヤキと関りが深くなりたい」「“ケヤキのまち”というイメージを広めていきたい」などの意見が挙がった。

ケヤキプロジェクト関係者や近隣住民に私の研究テーマである「観光まちづくり」について理解してもらうことが一番の課題となってくるのだと考えられる。また、合同ゼミの成果として、観光資源や地域資源に対して複数の視点から見ること。複数の視点から見ることで、地域資源の活用の幅が広がり、着地型観光を可能にしていくのだと考える。

5章　結論

本章では、研究目的の問いから、どのようにアプローチを入れていけば観光まちづくりにつなげられるのかまとめたものである。

1節　住民同士の連携とコミュニティづくり

観光の定義・まちづくりの定義から観光まちづくりの基盤として、地域住民が主体的に動いていくことが必要不可欠であることが考えられる。さらに、住民同士や地域外と連携することによって、今までにない今後のまちづくりの核となる新しいコミュニティとなり、観光面を意識した地域資源の再発掘や磨きがかかり地域づくりにつなげられる。

2節　地域資源が中心となる居場所の創出

地域資源が地域の居場所となることで、その居場所を軸とした資源の活用に住民の意識が向いてくるものだと考える。この居場所を創出することで、地域資源のことを観光資源として、考えることができるのではないだろうか。また、地域づくりインターンの立場として、地域住民と地域資源を繋げることが重要となってくる。

3節　歴史・自然を活かした体験型交流やスタディーツアーの提案

これらのことから、一つの地域資源に関連する資源をまち歩きや学習会等で調査し、地域資源を再発掘していくべきだと考える。さらに、地域資源を見る角度を変えることで資源の活用の幅が広がり、着地型観光が可能になってくる。

終章　松本市地域づくりインターンとして次年度以降に目指すもの

以上のことから、観光まちづくりを可能にしていくため次年度以降に目指すものは、既存の繋がり同士が交流するきっかけづくりを行い新しいコミュニティづくりを行うこと。また、地域外の人を受け入れ、地域資源の再発掘と資源の磨き上げを行うこと。そして、地域資源を観光資源として活用し、着地型観光に活かすようにしていく。

最後に、現在関わっている事業関係者たちに観光まちづくりについて理解を促していくとともに、地域資源の見方を複数の角度から見て活用の幅を広げていこうと考えている。

参考文献

・尾家建生・金井萬造編著『これで分かる！着地型観光　地域が主役のツーリズム』2008年
・NPO法人観光力推進ネットワーク・関西日本観光研究学会関西支部『地域創造のための観光マネジメント講座』2016年
・「松本市観光ビジョン」2018年4月
・中根裕『今こそ見直したい　みなとと観光みなとまちの観光資源の活かし方、育て方』

その他

・広辞苑「観光」https://sakura-paris.org/dict/広辞苑/prefix/観光（2019年3月16日閲覧）
・広辞苑「まちづくり」https://sakura-paris.org/dict/広辞苑/prefix/まちづくり（2019年3月16日閲覧）
・Wikipedia「まちづくり」https://ja.wikipedia.org/wiki/まちづくり（2019年3月16日閲覧）

脚注

[1]横田　裕：公益財団法人新潟観光コンベンション協会事務局次長。福島県生まれ。地域づくりコンサルタントに15年勤務。その後、新潟市を起点とし、県内各地の農家や酒蔵、ものづくり職人などと連携しながら地域主導の交流プログラムづくりを展開している。

[2]緑と景観を考える会：ケヤキプロジェクトに関わっている中で、平成28年6月より市民団体「緑と景観を考える会」が発足した。この会は、巾上西町会長の筒井敏男氏・ケヤキ所有者の松林氏・松本大学が中心となって緑と景観の保全に関わる活動を行う組織として発足した。

資料編（ケヤキプロジェクト振り返り）

2018年度　ケヤキプロジェクト　振り返り

ケヤキ祭り

良かった点
・ぬりえが好評でした。もっとケヤキと関わりが深くなれれば良いと思いました。
・山賊焼きは完売してよかった
・世代間交流ができたと感じた
・ケヤキを知る機会になったのではないか？

改善点・反省点
・午後は人がほぼ来なかった→全体のスケジュール表を作ればよかった
・子ども以外にも地域の人が休憩できるスペースが少ない→コミュニティスペースを作ればよかったかも
・次は、ケヤキの下で行ってみたらどうだろうか？

けやきっ子ひろば

良かった点
・20日→子どもたちがニジマスを取る、貴重な体験の手伝いをできてよかったです。自分の手で取った魚を食べる子どもたちの様子が嬉しそうだった。
・松林さんの庭で遊び、自然だけで遊びを見つける姿が印象に残っています。ニジマスに掴み取りは今後も続けていきたい
・個性豊かなコケ玉を作ることができた。コケの種類が多くて子どもたちは楽しめたと思う。大きさもちょうどよかったなと思う。
・作業に入るとみんな真剣で楽しそうだった
・ニジマスは親も来て、夏休みの課題用に写真を撮っていたので、ケヤキっ子ひろばの目的にも合っていて良かったと思う
・普段は体験できないことが出来て良いと思いました。（自然と触れ合うこと）→もう少し参加する人が増えても楽しいと思いました。

改善点・反省点
・4日、7日→昆虫勉強、コケ玉づくりでは、非常に勉強になったがずっと座って話を聞くのは子どもたちにとって少し退屈なのではないかと感じた
・七夕飾りは、もう少しバリエーションがあったら良かったと思う。ハサミの数を増やし、のりの残量も確認すべきだった。
・昔の遊びはみんなでできるものが良かった

落ち葉拾い

良かった点
・実施する日が多かったが、しっかりと分担して落ち葉を拾うことができた
・小学生との落ち葉拾いも楽しくできたので良かった→良い体験ができた
・学生の参加が地域の課題解決に有効に作用しているので、とても良い活動だと感じた
・たくさんの学生が参加することで地域の中のわだかまりがおさまり、素晴らしい活動だと感じた。
・ケヤキについて知ることができた
・小学生が落ち葉を集めることによって自然と触れ合えること
・みんな競争のように落ち葉を拾っていたのでゲーム感覚で行うと、すぐに葉がなくなるのだなと感じました。
・ケヤキのおかげで松林さんや地域の方々との交流、田川小のみんなと交流できてよかった
　コミュニケーションをとることで、地域交流ができていると感じた
地域の理解が得られてよかった
改善点・反省点
・子どもたちのほうが、場所に詳しく、好きな場所で作業できるため、危なくないか見るのが大変だった

焼き芋大会

良かった点
・子どもたちが喜んでいて良かった
・落ち葉拾いで会った子どもたちが覚えてくれていて嬉しかったです。
・大学生は小学生と触れ合うことがないから、いろいろと遊べて楽しめた
改善点・反省点
・大人数のため、遊ぶスペースが少し狭い印象だった。数人が隅で参加しない小学生がいたため、声をかけられたら良かった。喧嘩しても自分から仲直りして、とても良い学年だった
・焼き芋の順序が確認できていなかったので、当日バタバタしてしまった。一緒に食べたかった
今後やりたいこと
・ケヤキのお菓子を実現し、“ケヤキのまち”というイメージを広めていきたい。活かしたまちづくりを行いたい
・落ち葉を使って何かの形にする、作品のようなものを作るといいと思います。→落ち葉を使って、1「秋のアートづくり」2「宝さがし」3「落ち葉でプールを作る」など
・松林邸のケヤキと渚城や妙福寺や常徳寺との関係を調査して、ケヤキが地域にとって、どんな役割を担ってきたのか見つける。
・公民館やケヤキ祭りの際に、これまで行ってきた活動を展示や説明会をしてみたらどうか？